

創造力、実践力。

国立大学法人



福井大学

# 学生生活 実態調査 2010

報告書



福井大学

高等教育推進センター

# ま え が き

## 教育改革と「学生生活実態調査 2010」

理事（教育・学生担当）・副学長  
高等教育推進センター長  
寺 岡 英 男

昨年度実施した「学生生活実態調査 2010」の報告書が刊行されることになった。福井大学としては、この種の大掛かりな調査は 10 年ぶりで、統合後初めての調査であった。

この調査結果はいろいろな意味で、分析作業に入る前から注目を浴び論議を呼ぶものとなった。その 1 つは、昨年度運営費交付金の大幅削減の動きへの対応との関わりである。1 割ともいわれた大幅削減は、本学にとっては存立の基盤を揺るがしかねない事態であるとして、本学は学長声明や国、県、政党等への要請行動、街頭署名活動などを行った。この運動の有力な拠り所となったのが、本調査結果だった。大幅削減されるならば、授業料の大幅値上げもせざるを得ない状況に追い込まれるという事態の中で、調査結果は、本学学生の家庭の年収 500 万円未満が 3 割を超えることを明らかにした。大幅削減が引き起こす可能性のある授業料の値上げや奨学金等の減額は、学生の教育の機会を奪うことに直結するというを示した。もう 1 つは、その後の調査結果の分析の中で明らかになった、本学学生の学習時間が 1 週間で 3 時間未満が 6 割を超えるという実態であった。教育での GP の獲得や教育改革を進めていく上で、足元の実態をふまえる必要があるということで行った調査ではあるが、この結果は改めて私たちに衝撃をもたらした。これが直截の契機になり、新年早々の学長の「教育改革元年」宣言となった。

このように調査分析の最終的な報告の前から、いろいろ論議を呼んだ「学生生活実態調査」の結果であるが、この調査は、次のようなことを目的として行われた。すなわち、本学の長期目標では「学生の人間的成長を支えることで、高度な専門性と豊かな社会性を有し、21 世紀のグローバル社会で高度専門職業人として活躍できる人材を育成する」ことを謳い、中期目標・中期計画でその実現に向けて、生活や人間的成長の面、学修面、職業的自立（就職）面を合わせて教育改革を図ることがめざされている。昨年秋に調査が実施され、その後分析が行われまとめられた本調査報告書は、学生の生活実態全般について状況を明らかにしながら、いま取り組み始めている教育改革を意味のあるものにするための一助にするという役割をもつ。

本調査結果をもとに、高等教育推進センターを中心に、全学的にも各部局においても、文字通り「教育改革元年」にふさわしい改革の取組みを進めていかなければならない。よろしくご活用いただきたい。

最後に、本調査の実施と報告書作成に当たってご尽力いただいた、高等教育推進センター・学生支援部門の上野栄一部門長を始めとする部門員及び実態調査ワーキングの先生方、保健管理センターの細田先生、調査を支えていただいた学生支援センター各課室の事務関係職員の皆さんに心から感謝を申し上げます。

## 目 次

まえがき 教育改革と「学生生活実態調査 2010」	1
理事（教育・学生担当）・副学長 高等教育推進センター長 寺 岡 英 男	
学生生活実態調査2010 調査結果の概要	3
高等教育推進センター学生支援部門長 上 野 栄 一	
調 査 結 果	
A 基本事項	21
B 家族	30
C 住居と通学	34
D 日頃の生活費	40
E 日頃の生活実態	57
F あなたの健康状態	76
G 大学の授業について	86
H 課外活動について	112
K 安全について	121
M 大学への意見・要望	124
学生生活実態調査2010調査票・回答票	143
学生生活実態調査の実施・分析の経緯	146
学生支援部門・学生生活実態調査ワーキング委員名簿	147

# 学生生活実態調査2010 調査結果の概要

高等教育推進センター 学生支援部門長 上野 栄一

## 調査の目的・経緯

福井大学では、「福井大学学生生活実態調査 2010」を平成22年10月に実施しました。調査内容は、「基本事項」「家族」「住居と通学」「生活費」「生活実態」「健康状態」「大学の授業」「課外活動等」「意見・要望」の9大項目、約100以上の質問項目で構成されています。

調査は、全学部生・大学院生を対象に4,958名に配布し、2,441名の回収を得ました（回収率49.2%）。大規模な実態調査となったことは、これからの多様化する学生のニーズに応えることが可能となることを意味します。本学ではこれまで、学生満足度調査や学生の日常の声を聴きながら、大学施設の改修や修学・学生生活環境の改善に努めてきました。この調査結果は、更なる具体的な改善・充実に反映させようと考えています。

本調査は、ほぼ全学生（正規生）を対象とし、また、個人のプライバシーを侵害することのないよう、無記名式としており、回答者が特定されないことがないように倫理的配慮をしています。調査は、平成22年10月1日～10月20日に実施されました。

本学生実態調査の目的・組織等は次のとおりです。

### 1. 調査の目的

本学学生の生活実態を把握するとともに、大学に対する学生の意見や要望等を聴取し、今後の学生生活や修学環境の改善を図るための基礎資料を得ることを目的とする。

### 2. 調査組織

高等教育推進センター学生支援部門、学生生活実態調査ワーキンググループ

### 3. 調査の実施時期

この調査は、平成22年10月1日現在とし、調査期間は、10月1日～10月20日とする。

### 4. 調査の対象

平成22年10月1日現在在籍する全学生（正規生）とする。ただし、教職大学院・スクールリーダー養成コース学生、医学系研究科博士課程の学生及び休学中の学生は除く。

具体的な活動としては、平成22年6月16日 高等教育推進センター運営委員会にて、学生生活実態調査ワーキンググループの設置が承認され、ワーキングの中で学生が主体的に学ぶことができる学習環境づくりの提言に向けて、学生が求める（必要とする）具体的な支援策や支援体制、施設整備等のあり方を検討するため、学生の修学・生活実態について調査・把握・分析を行うことを目的として活動してきました。学生支援には、具体的な対策が必要ですが、そのためには、現状の把握が必要であり本実態調査は、単に実態を調査するだけではなく、今後の具体的な学生支援に活用するために

実施しました。おかげさまで、多くの学生の協力を得ることができ、今後学生のニーズに基づいた具体的支援ができるものと期待しているところです。経営学では、PDCAサイクルという手法がありますが、このPlan-Do-Check-Actionが示すように、学生支援は情報収集から始まり計画から実施・評価まで一連のプロセスを得ることが重要です。また、一人一人の学生へのきめ細かな支援が可能となりますので、学業、健康面、学習環境への具体的な支援策（福利厚生、修学援助、授業・研究環境、課外活動等の施策、立案、改善）をとることが可能となります。

生活実態調査ワーキングによる分析・評価は、学部・課程・学科レベルの概略的なものにとどまっていますが、データとしては、より細かな分析が可能です。今後、各学部の関係委員会で活用していただき、課程・学科・学年ごとのきめ細かな支援策づくりに役立てていただければ幸いです。

最後に、アンケートにご協力をいただいた学生諸君、配布・回収にご協力をいただいた先生方、ならびに関係各位のご尽力に感謝いたします。

The image shows the cover and a portion of the questionnaire for the 'Fukui University Student Life Survey 2010'. The cover is white with black text and a central box containing a message. The questionnaire form is partially visible behind the cover, showing a grid with various categories and checkboxes.

**福井大学**  
**学生生活実態調査 2010**  
**調査票・回答票**

学生支援策検討のための  
 貴重な基礎データとなります  
 積極的なご協力をお願いします

2010年10月  
 福井大学高等教育推進センター

1/3

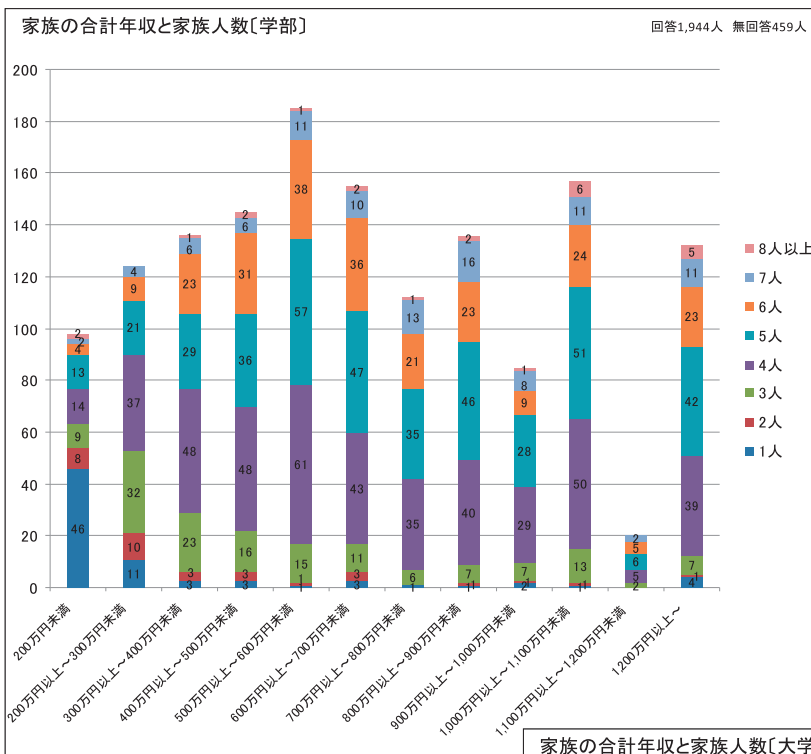
今回の学生生活実態調査結果のデータ、資料等について、学部・課程・学科等で利用を希望する場合は、学生サービス課にご連絡ください。

# 調査結果の概要

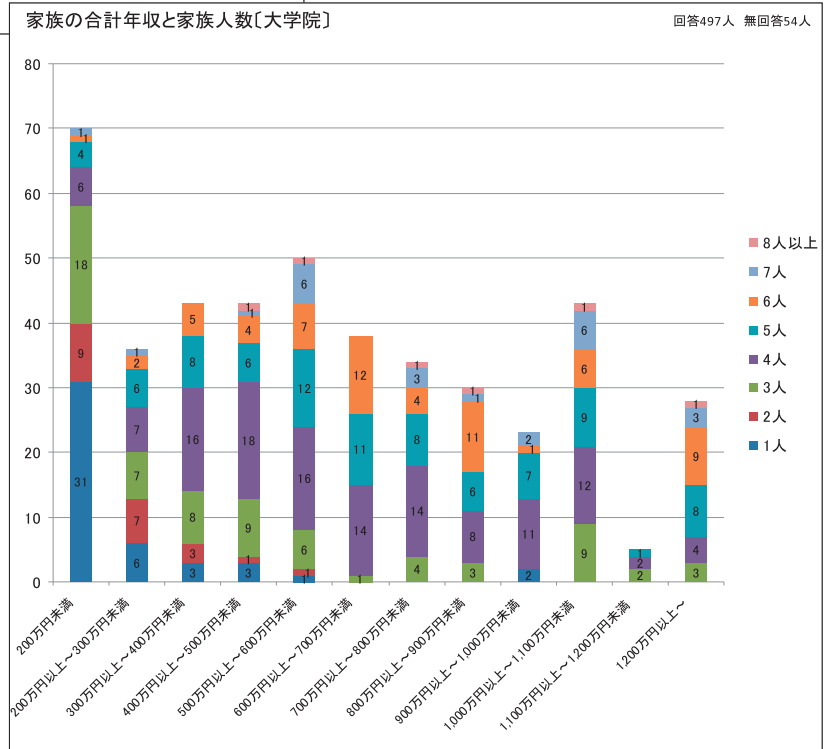
## 学生の経済状況

家族の合計年収が500万円未満は、学部33.9%、大学院38.6%となっている。大学院では200万円未満が多い。これは、留学生、単身者が多いということが影響していると考えられる。全体としては500万円未満が多いことは、学生のアルバイトの時間が多いこととも連動していると考えられる。授業料免除の拡大や奨学金などの修学支援が必要である。

### 学部



### 大学院

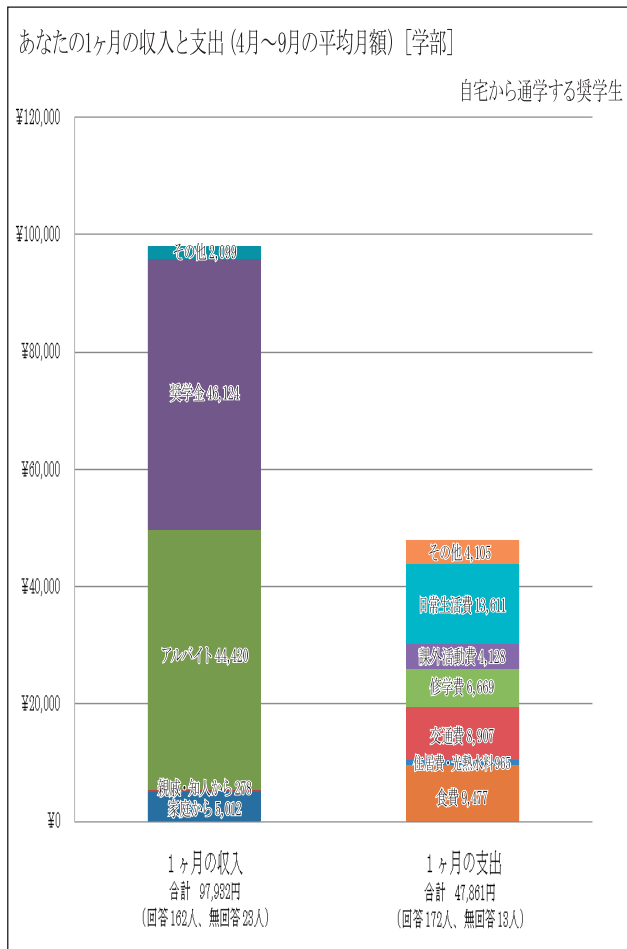


## 日頃の生活費

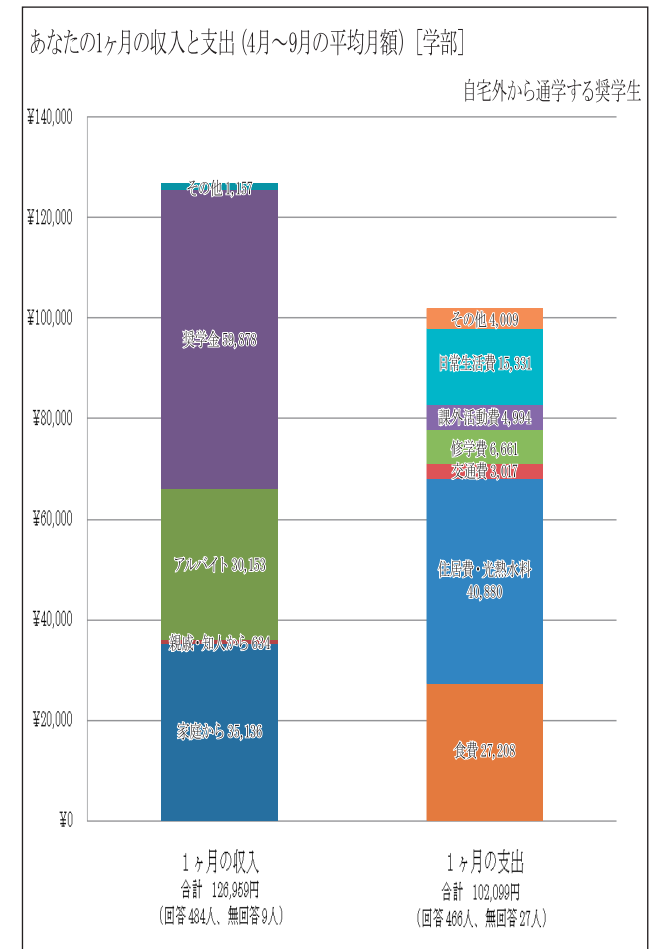
### ◆1ヶ月の収入・支出

全般的に支出が控えめとなっており、学生の節約状況が伺える。また、非奨学生はアルバイトへの依存が高い。自宅外から通学する奨学生は、住居費等に約4割の支出がある。奨学資金の支援が必要と考える。

#### 自宅から通学（学部）



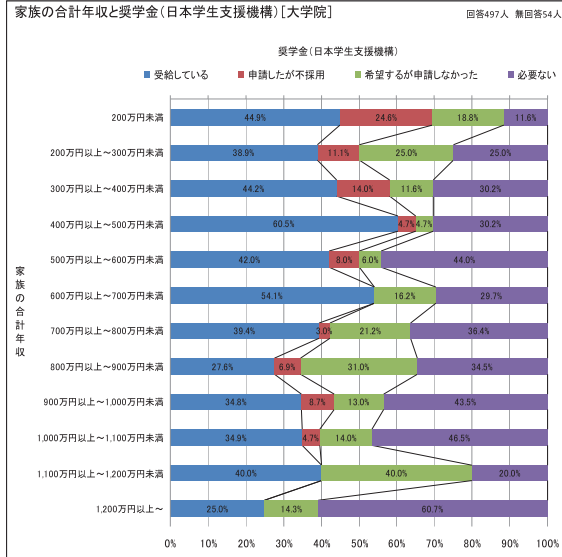
#### 自宅外から通学（学部）



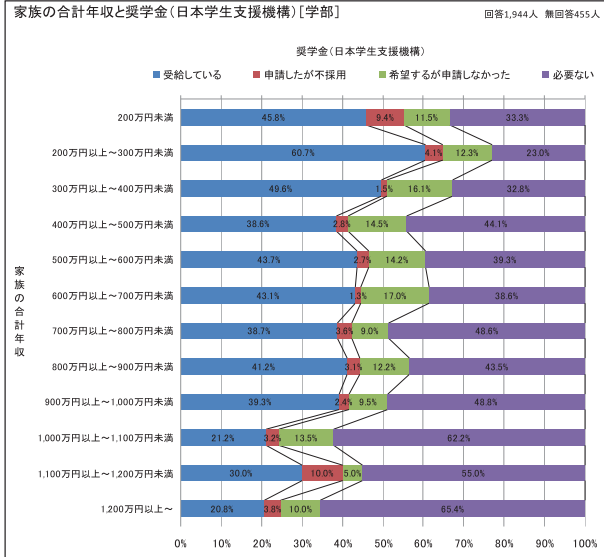
## ◆奨学金

奨学金受給者は、学部37.2%、大学院41.3%となっている。奨学金を受けていない理由として、「制度をよく知らない」「返済しなければならない」があげられた。今後は、奨学金の情報提供、給付型独自奨学金（基金等）の検討が必要と考える。

### 学部



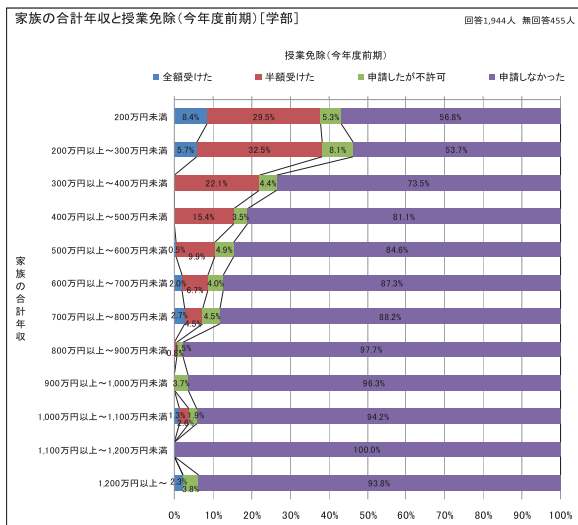
### 大学院



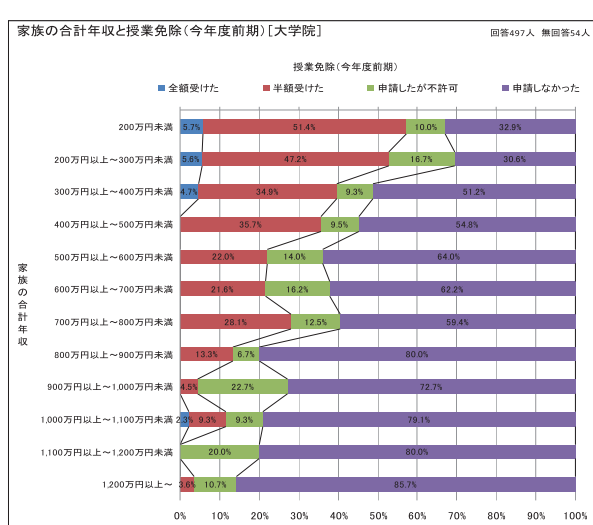
## ◆授業料免除

家族の合計収入が少ない学生が多いのに比べ、授業料免除を受けている学生が少ない。今後は、授業料免除枠の拡大、経済的条件優先の検討が必要である。

### 学部



### 大学院

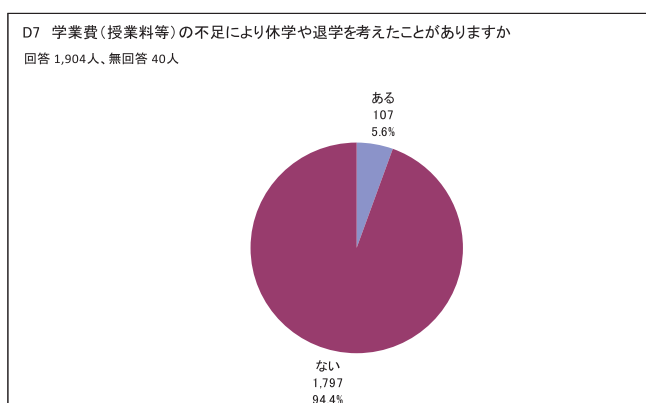




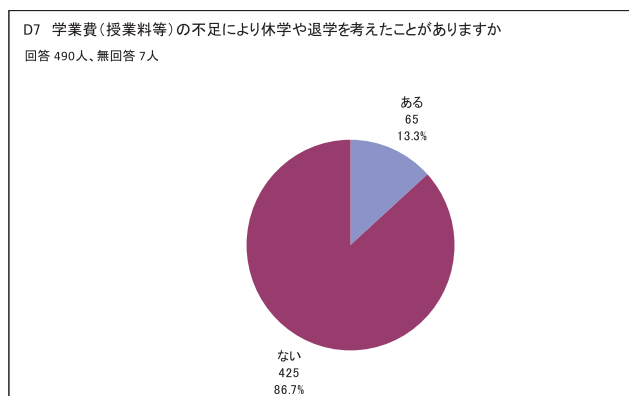
## ◆学業費の不足により休学・退学を考えたことがある学生

学部では、学業費の不足により休学・退学を考えたことがある学生が、5.6%（107人）、大学院 13.3%（65人）いる。また、既に休学している学生を含めると実際はもっと多いと推察される。学業費を払えないことによる経済的理由により、さらに休学が増える可能性があり、一時貸付制度などの検討が急務である。今後は授業料免除方式（半額免除優先）の見直しや特別枠の確保を考える必要がある。

### 学部



### 大学院

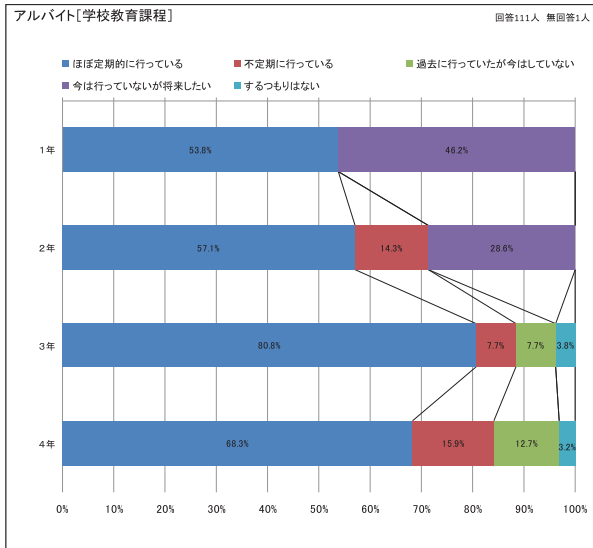


## ◆アルバイト

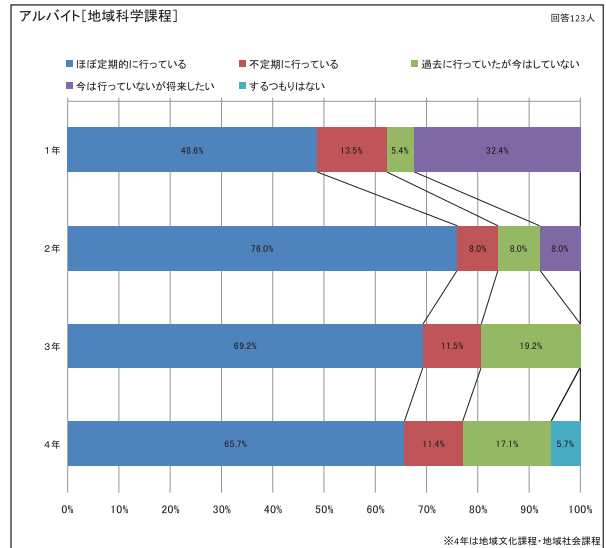
アルバイトをしている学部学生は66%を占め、また、大学院生では、65%を占めた。近年の経済情勢の悪化も反映していると考えられる。

特に看護学科学生が73.2%と多かった。看護学科学生の場合は、附属病院でのアルバイトも含まれている。アルバイトは、生活費や学費を得るためにも必要と考えている学生も多い。アルバイトにより、学業や健康状態への影響も考えられるため、修学援助およびアルバイトの情報を提供することにより、学業や健康面を考慮しながら自分に適したアルバイトを選択できるよう支援が必要である。

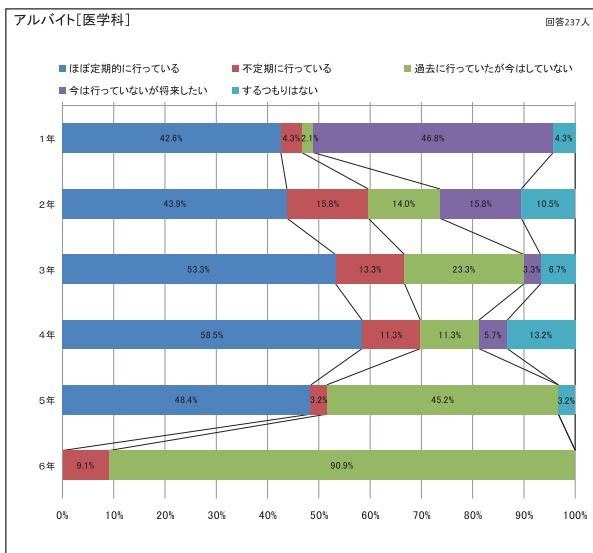
## 学校教育課程



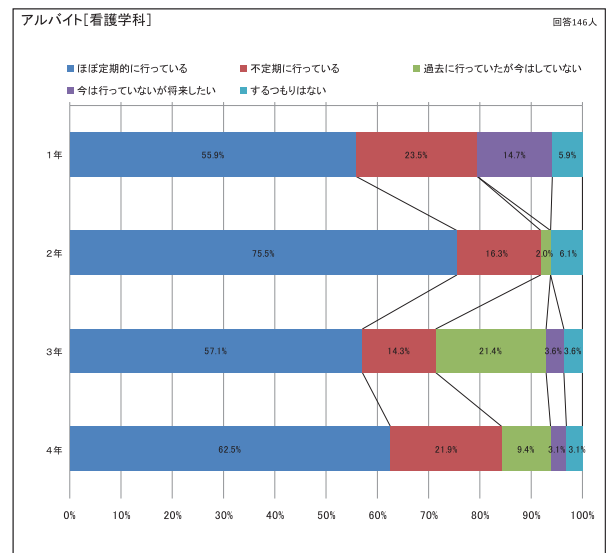
## 地域科学課程



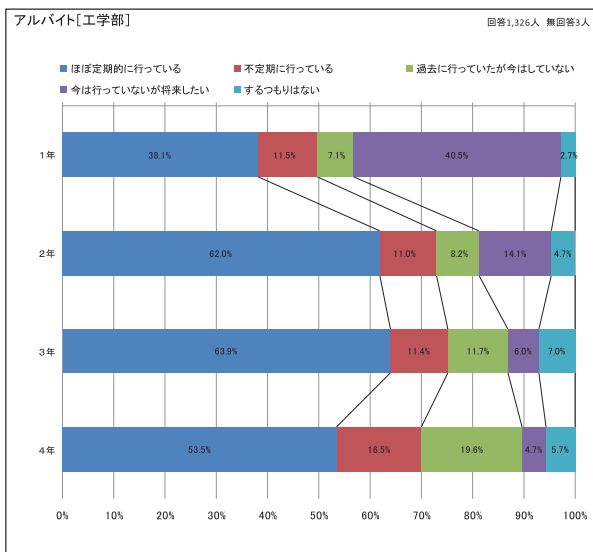
## 医学科



## 看護学科



## 工学部



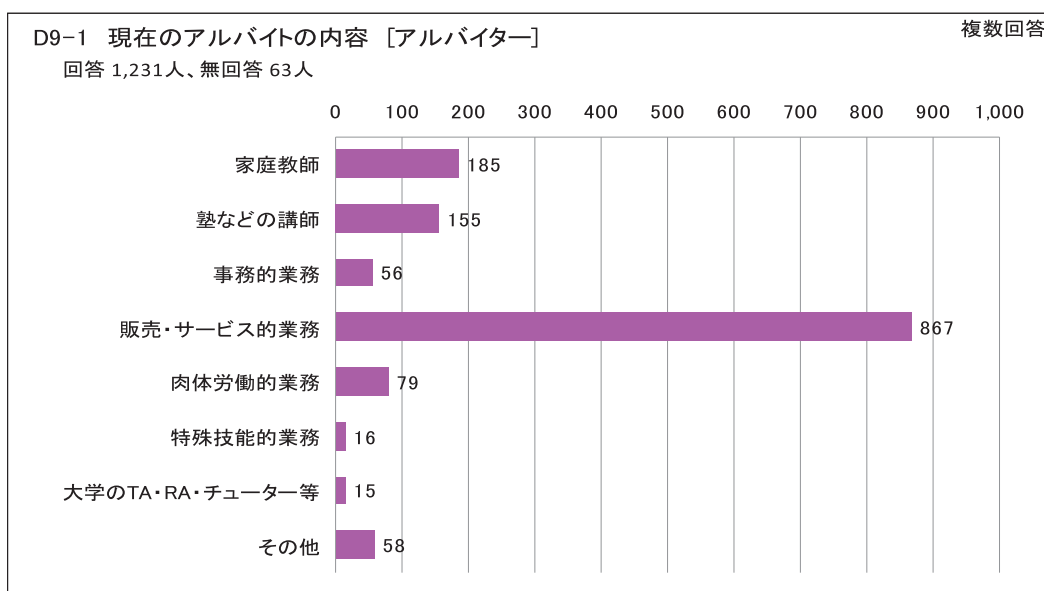
## ◆アルバイトの内容・目的

アルバイトの目的では工学部、大学院では生活費捻出1位、他学部では余暇娯楽費捻出1位となっている。総じて大学でのアルバイトを希望する学生が多い。アルバイトの内容としては、学部、大学院ともに販売・サービスの業務が多い。

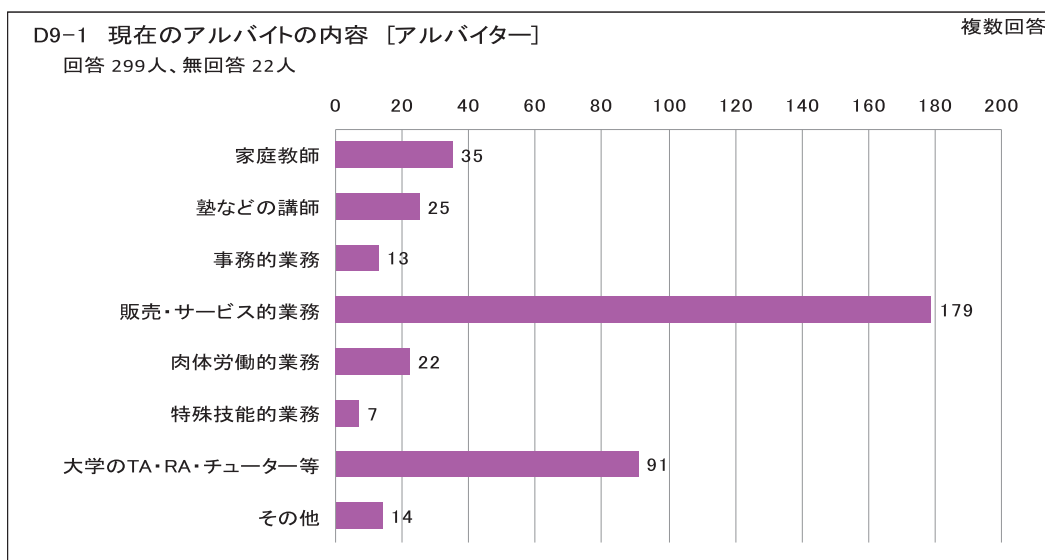
家庭教師が前回調査より減少（32.4%→14.4%）している。また、販売・サービスの業務が増加（44.1%→68.4%）している。

学生のアルバイトは授業が終了してからのアルバイトであり、夜遅くまでアルバイトをしている学生も多い。勉学や健康にも影響の出ることも懸念されるため、アルバイトの情報提供も必要である。看護学科では、同附属病院でのアルバイトが可能であり、講義後3時間程度のアルバイトで、学生には好評、かつ健康面、学業面への影響も少ない。

### 学部



### 大学院



## 日頃の生活実態



- 1) 起床時間（遅いとき） ⇒学部でも昼過ぎまで寝ている学生が多い。  
授業中の居眠りなどの弊害もあるので生活指導が必要である。
- 2) 就寝時間 ⇒早いとき、遅いときのいずれも 24 時以降が多い（夜型）  
授業中の居眠りや健康への影響も考えられる。今後の指導が必要である。
- 3) 睡眠 ⇒「ほとんど毎日不眠状態」「ときどき不眠になる」が結構多い。  
睡眠は健康のバロメーターである。時々不眠も入れると、約4割いる。
- 4) 朝食 ⇒工学部では「食べないことが多い」「ほとんど食べない」が他学部・大学院に比べて多い（42.3%）。
- 5) 飲酒の回数 ⇒医学部（医学科）、大学院が多い（月1回以上 約70%）  
飲酒はほとんどの学生がしている。アルコールの健康への影響などの啓蒙活動も今後引き続き必要である。
- 6) 土曜・日曜・休日に過ごす相手  
「一人」50%が前回より増加（前回28%）であり、生活習慣が大きく変化していることが読みとれる。前回実態調査では40%であり、一人でゲーム、漫画、あるいはインターネットの利用が増えていることが考えられる。「その他の友人」20%となっている。

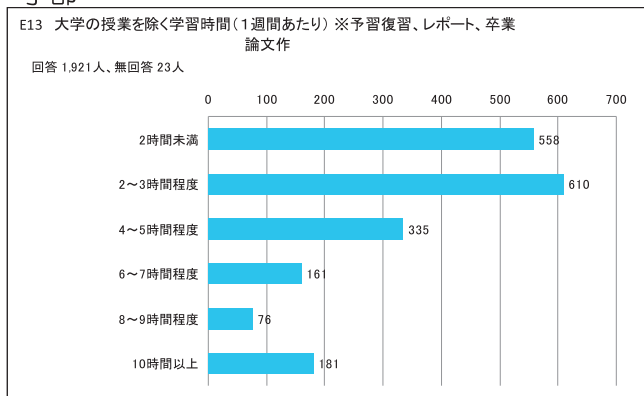
### ◆授業を除く学習時間（1週間）

学部では、3時間未満が60%。教育・医学は2～3時間程度が多いが、工学部は2時間未満が多い（インターネット、学術書読書を加えると少し増える。）。

平均4時間程度は、全国平均よりやや少ない。前回調査では「ほとんどしない」「2～3時間程度」86.7%であり、学年が上がるに従って、各学部とも時間数は増加している。

学習時間が少ない要因としては、受験勉強からの開放（大学での学びの意識不足）、大学生生活のエンジョイ（サークル、娯楽、アルバイトなど）、履修科目が多く自学自習時間（空き時間）が少ない（教員免許、コアカリ、実験実習など）など、様々な要因が考えられる。今後は、学習時間を増やすために、初年次教育などによる「大学での学び」の指導、サークル活動やアルバイトにおける指導などが必要と考える。

### 学部



#### （参考）

- 1週間あたり平均学習時間数（卒論作成等含む）
- 本学（学部） 3.7h・・・ ※1
- 全国平均 5.8h+3.5h（卒論） ※2
- 一橋大学 4.1h+3.6h（卒論） ※3

※1 「各ランク時間の中間値×人数」の計/全回答者数  
ただし、10時間以上は10時間で算出

※2 東京大学の大学経営・政策研究センター実施の  
全国学生調査（2007年）から

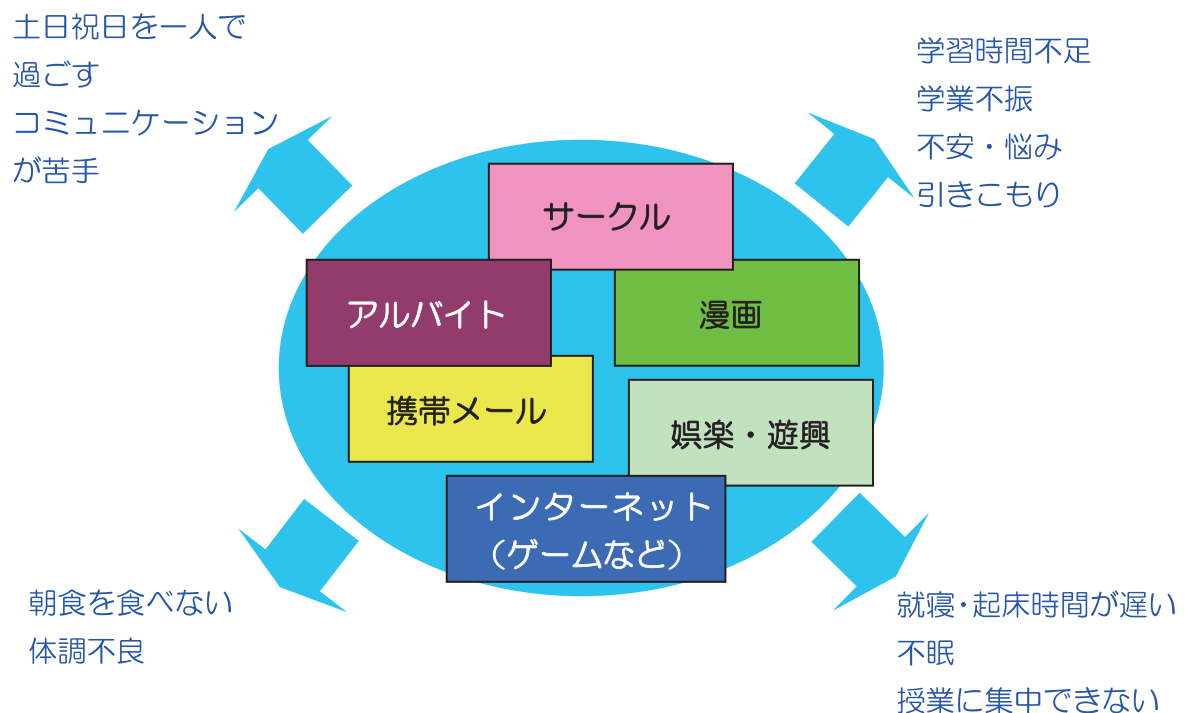
※3 一橋大学の全学部学生調査（2007年）から

## ◆その他

- 1) 一般的な読書時間（1週間）は2時間未満 57.4%（前回 43%）と減少している。  
勉強時間の減少とともに読書時間も減少している。
- 2) 新聞は教育地域科学部は比較的新聞を読んでいる。他学部・大学院では、ネットで読んでいる場合も考えられる。
- 3) インターネット利用時間（1週間）は、全体的に利用時間が多い。工学部、大学院では 10 時間以上が多い。学習利用かゲームかは不明であるが、かなりの時間をインターネットに費やしている学生像がうかがえる。
- 4) 所有する情報機器としては、全体の 80%がノート PC 所有している。今後、これらのリソースを活用する意味でも授業での活用や無線 LAN 整備を検討する必要がある。

これらのアンケート結果からは、学生の多忙な実態が浮かび上がってくる。生活習慣も変化しており、学業や健康面への影響が大きくなってきている。

### 日頃の生活実態—福大生は夜も忙しい?—



## 健康—悩み・不安、内容—

### 1) 悩み・不安

平成 12 年度と同様に、7 割近い学生が何らかの悩み・不安を抱えている。「常にある」を選んだ学生は、平成 12 年度と比べて若干減少している。

### 2) 悩み・不安の内容

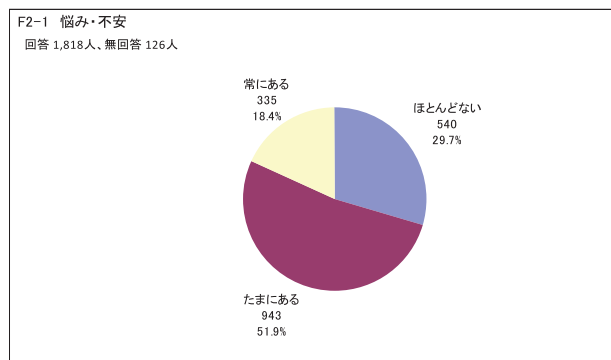
悩み・不安を抱える学生の 5 割～6 割が、「勉学・研究関係」「就職・進路関係」といった大学と直接関わることに不安を感じていて、この点では平成 12 年度と変化はない。悩みの内容では、平成 12 年度は異性問題、経済問題となっていたが、今回は交友関係、異性問題、自分の性格と変化していた。異性よりも同性との交流や自分自身との付き合い方に悩む学生が増加している。

### 3) 悩み・不安の相談相手

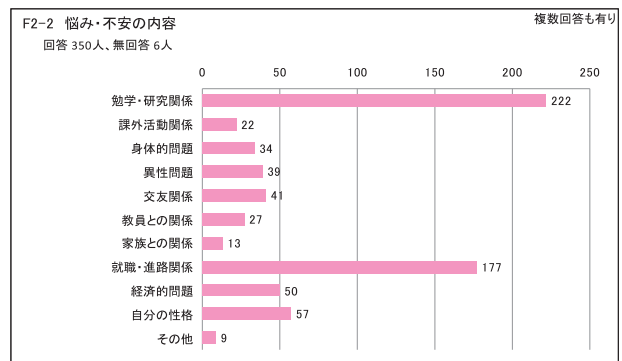
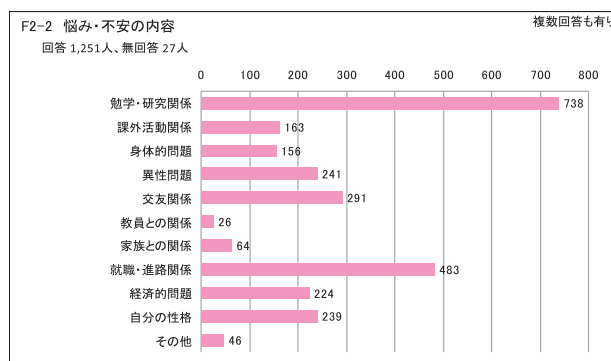
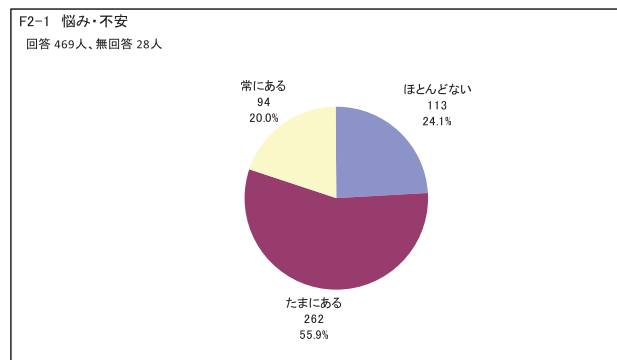
1 位「先輩・友人（85%）」、2 位「家族（34%）」、3 位「カウンセラー（4.4%）」となったが、「相談相手がいない（23%）」は気になるところである。

これらの結果は、前回と同様 7 割の学生が何らかの悩みや不安を抱えていた。内容も勉学や進路等と大学と直接関わるのが一番多い点は変わりなかったが、経済的悩みが後退して、交友関係、異性問題、自分の性格が増えている。交友関係は同性との関係であり、自分の性格の問題は、自分との関係であると考えられる。

### 学部



### 大学院



## 大学の授業—学部—

### 1) 授業の出席状況

どの授業もほとんど出席している学生が、専門科目、共通・教育科目とも多いが、「一部の授業を除いてほとんど出席している」「どの授業も出たり出なかったり」「一部の授業を除いてあまり出席していない」学生もいる。

### 2) 出席しない理由

授業に魅力がない、大学が面白くないといった学生が小人数ではあるがいる。このような学生に対しては、将来的に休学などの可能性もあるため、より一層の授業の改善等も必要である。

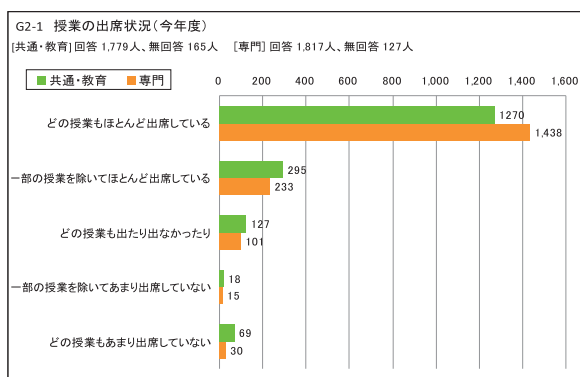
### 3) 理解度

理解できないものがかなりあるとの回答が最も多い。学生の学力にも起因している可能性はあるが、授業の工夫と学生個々人の勉強時間を増やす働きかけを考える必要がある。

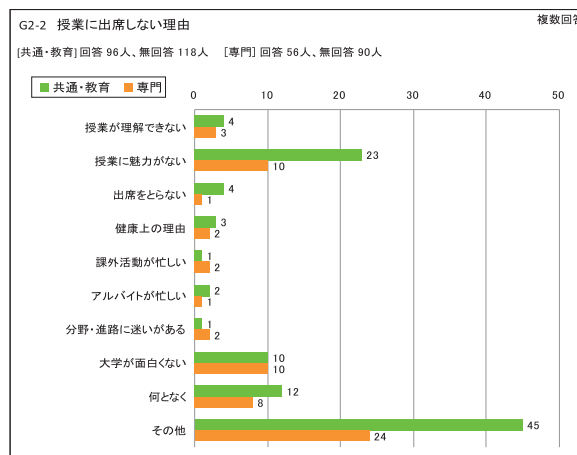
### 4) 満足度

満足できないものが多少あるとの回答が最も多い。授業の理解度とも関連している項目でもあり、今後授業の工夫が求められる。

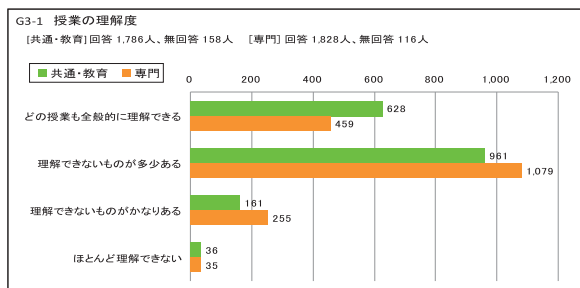
#### 出席状況



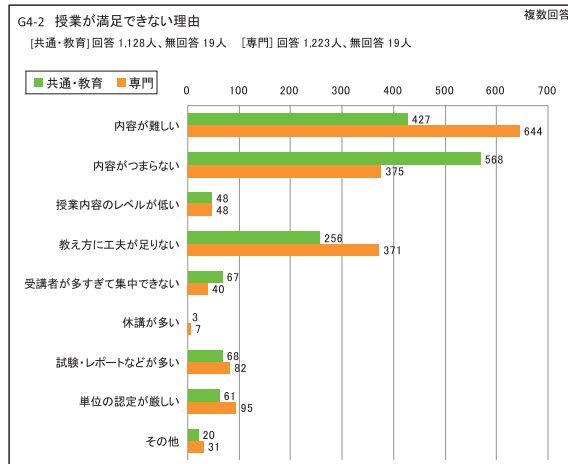
#### 出席しない理由



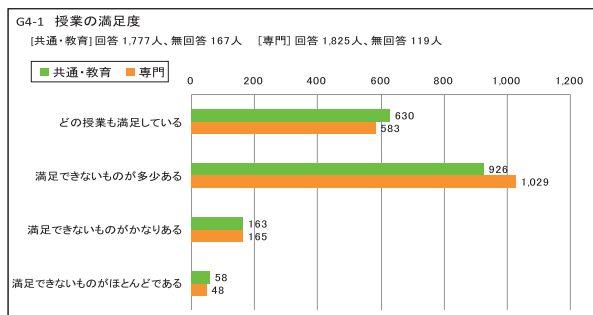
#### 理解度



#### 満足度できない理由



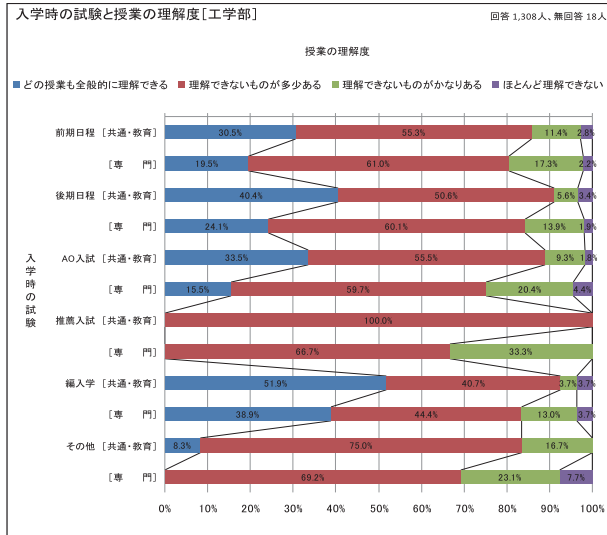
#### 満足度



## 5) 入学時の試験と授業の理解度

AO、推薦入試で理解度が低い学生が多い（工学部）。「どの授業も出たり出なかったり」～「あまり出席していない」が少数でも注意が必要である。不登校、引きこもり学生の存在も考えられるため、学生との面談も必要である。

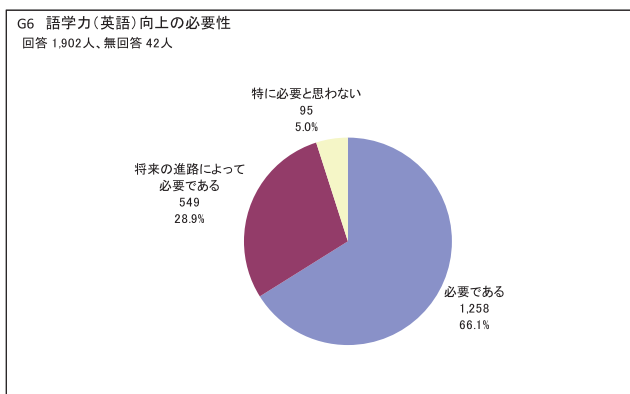
### 入学時の試験と授業の理解度（工学部）



## ◆ 語学力の向上

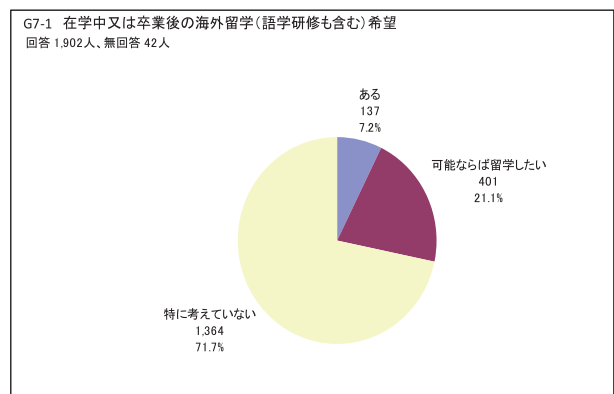
海外への留学希望が多い。希望の学生に対する具体的な支援策の検討、語学センターを中心とした総合的な支援が必要である。

### 学部



「必要である」	
学校教育課程（教育地域科学部）	58.2%
医学科（医学部）	72.9%
工学部	67.6%
大学院	75.8%

### 学部



「(留学希望)ある」+「可能ならば留学したい」	
学校教育課程（教育地域科学部）	72.7%
医学科（医学部）	48.5%
工学部	24.0%
大学院	33.9%



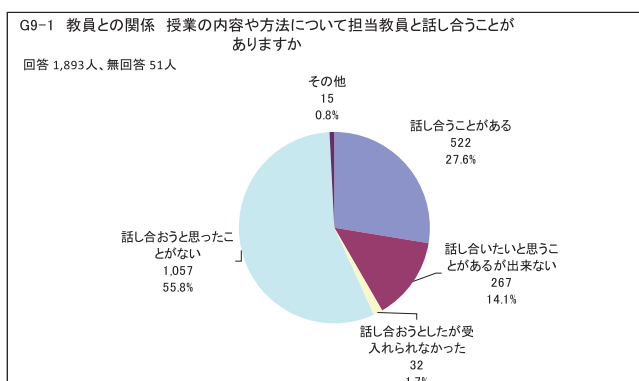
## 教員との関係

「助言教員・学年主任が分からない」学生がいる。

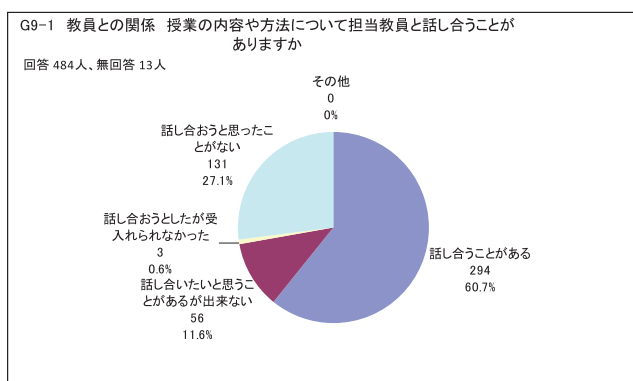
「話し合おうと思ったことがない」学生が半数以上いる。本制度の周知など、改善が必要である。

教員への期待については、850名の学部学生が「現状のままでよい」と答えているが、538名が「授業方法を工夫してほしい」、「授業内容を充実してほしい」（317名）、「気軽に話ができる雰囲気してほしい」（321名）となっている。今後、授業内容の充実や学生とのコミュニケーションがとれる工夫が必要である。

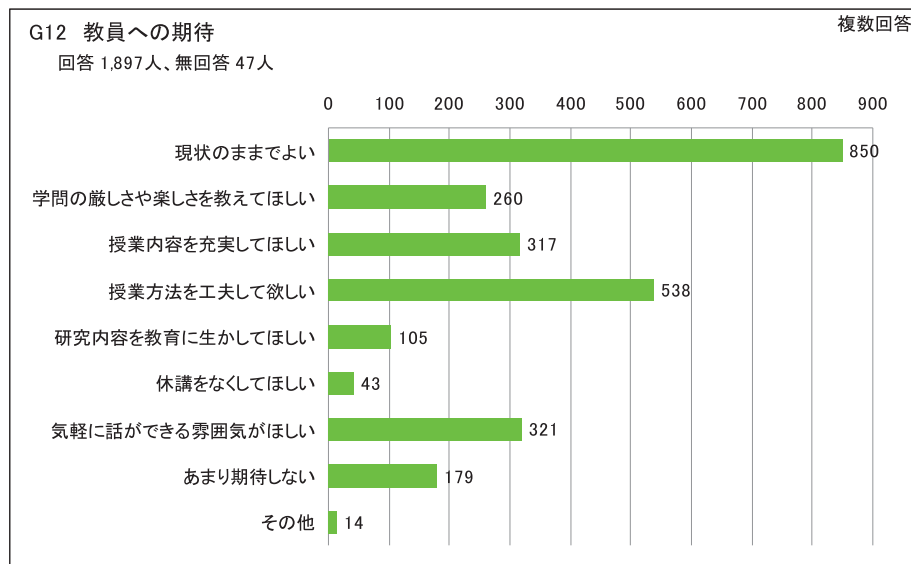
### 学部



### 大学院



### ◆教員への期待（学部）



## 課外活動

### 1) 学内の課外活動

- ・医学部で「参加している」学生が特に多い。(73.9%)

### 2) やめた理由

- ・「学業との両立が困難」が学部・大学院ともに多く、「人間関係」も学部では多い。

### 3) 課外活動の日数・土日の課外活動

- ・医学部では「週3～5日」が72%、土日の課外活動も「毎週」が73.7%と突出して多い。学習時間も比較的多く、学業と課外活動が中心。

### 4) 課外活動の目的

- ・どの学部、大学院も「趣味・娯楽」「友人を得る」が共通して多い。

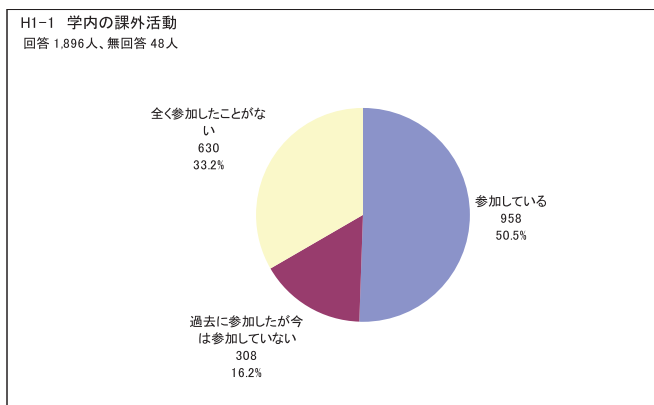
### 5) 課外活動の問題点

- ・どの学部、大学院とも「お金がかかる」が一番多い。
- ・「大学の支援がない・弱い」については検討を要するが、課外活動の支援までは、なかなか行き届かない状況である。

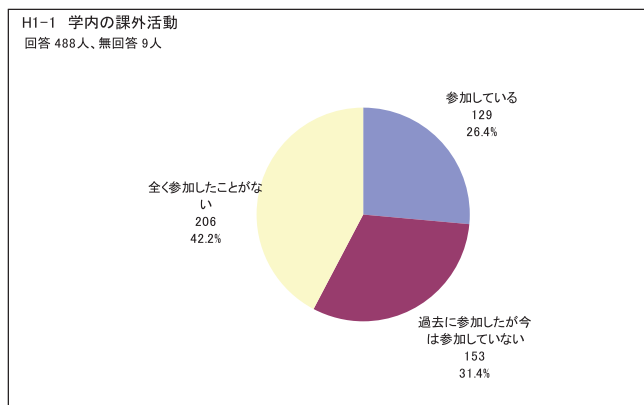
### 6) ボランティアの経験

- ・全学では「参加したことがある」「機会があれば参加したい」がそれぞれ4割程度。
- ・教育地域科学部では「参加したことがある」が過半数。ただし、地域科学課程は「機会があれば参加したい」が6割。
- ・医学部では看護学科が「参加したことがある」との回答が過半数であった。

### 学部



### 大学院

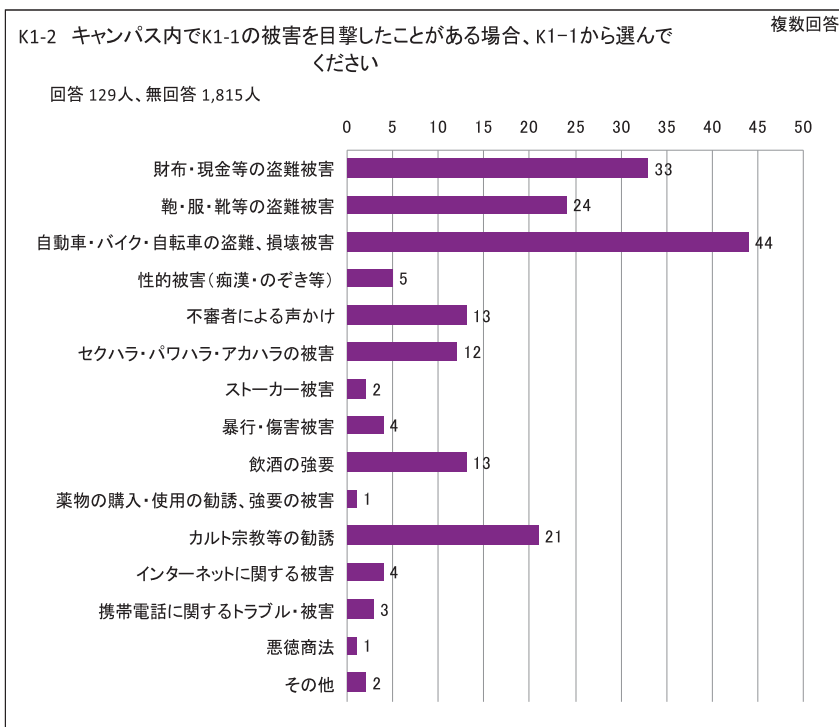
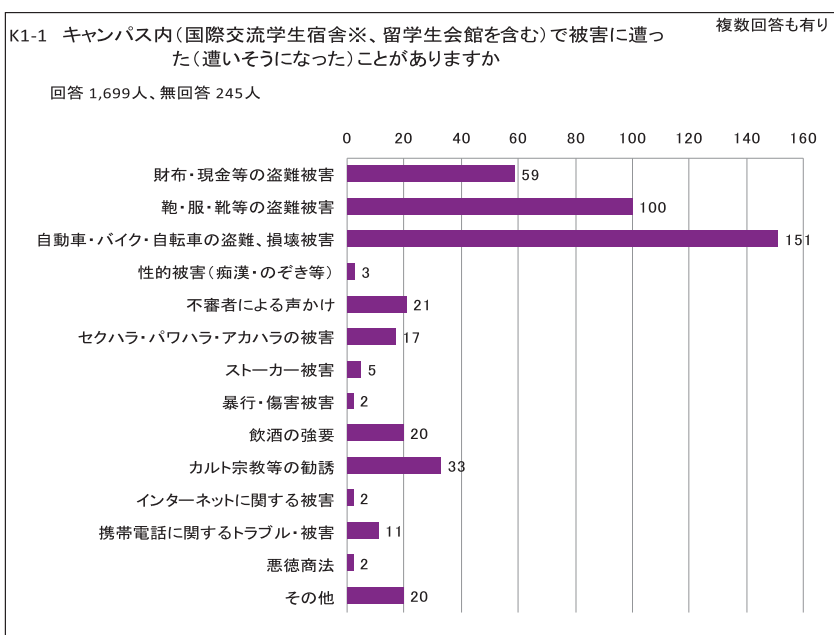


## 安全

全体的に盗難被害が多い。「カルト宗教の勧誘」も少なからずある「セクハラ・パワハラ・アカハラ」「飲酒の強要」も皆無ではない。今後は、より一層の対応策が必要である。

大学構内で身の危険を感じる場所としては、文京では「構内での車、バイク等による危険、不法駐車」「古い建物、工学部 4 号館付近、夜の駐車場」が多い。松岡では「夜間の廊下、建物から駐車場までが暗い、駐車場が暗い」とする意見が多い。今後は、街灯の設置、駐車場・駐輪場の確保、構内交通の検討、学生のマナー向上などをすすめる必要がある。

## 学部



## 大学への意見・要望

大学への要望として、様々な意見があった。主なものは次のとおりである。

### ◆広報

- ・学生の要望の中には実施済みのものも多くあり、情報が行き渡るようにする工夫が必要

### ◆駐車場

- ・駐車場の拡充に関する要望が大。有料化による拡充も検討に値する

### ◆生協

- ・品ぞろえ、営業時間、価格などに対する無理な要望も多い。学生に対する生協からの説明が必要（生協でも検討中）。

### ◆無線 LAN 導入

- ・多くの要望があり、早く利用できるよう検討が必要。

### ◆履修登録

- ・学外からの登録を望む声が多い（新システムで対応予定）。

### ◆その他

- ・「生徒」と書く学生が見受けられる。学生の意識を変えるためにも「学生」を使うように指導すべき
- ・学生のマナーの悪さに関する意見があるが、社会人として相互に注意しあう責任と自覚を持たせるような指導が必要である。

## 学部

